



イケン先生の『恐縮ですが…一言コラム』

第 586 回 「直会(なおらい)」は重要な神事である

2014.7.20

京都の祇園、博多祇園山笠をはじめ、この時期、全国的に「夏まつり」で賑わう時である。我が故郷・熊谷でも「うちわ祭」と称して、75万人の集客力を誇る祇園祭が開催され、熊谷中祭り一色になる。日本には一年を通じて、実に多種多様な祭りが各地にあり、その数は、10万とも30万ともいわれる。ただ楽しく、純粋に祭りに参加すればよいのだが、例によってのヘリクツ屋ゆえ、実に余計なことだが、祭りに関わる蘊蓄(うんちく)を調べたくなった。

イベント以外の伝統的な祭りの元々の語源は、神様を「待つ」「祀る」という意味で、神をお迎えし、もてなし、喜んで戴いて、お送りするというのが原点。それが儀式として形成され、「精進潔斎・お迎えの儀礼・直会(なおらい)・宴会」という部分から成り立ち、一連のものになっている。「**精進潔斎**」とは、神をお迎えする前に身を清めること、神様にお供え物をしてもてなす「**お迎えの儀礼**」、その中で神を喜ばせるためにできたのが『芸能』と呼ばれている。

神事の最後にあるのが、「**直会**」である。

神社本庁のホームページによると、「直会」とは、祭りの終了後に、神前に供えた御饌御酒(みけみき)を神職をはじめ参列者の方々に戴くことをいう。

この共食により神と人が一体となること、つまり「**神人共食**」という祭りの根本的意義が示されている。この儀式の場が「直会」であるという。

「お祭りが無事終了してご苦労様」という念から、飲めや歌えのドンチャン騒ぎ、勢い余って喧嘩沙汰まで見受けられる大宴会のようだが、実は大違い、これも大切な神事なのである。

本来、神事であるお祭りに奉仕するにあたり、神職はもちろん関係者は、心身の清浄につとめるなどの**齋戒**をしなければならない、つまり「精進潔斎」である。

神社本庁の「齋戒に関する規程」には、「齋戒中は、潔斎して身体を清め、衣服を改め、居室を異にし、飲食を慎み、思念、言語、動作を正しくし、穢(けがれ)、不浄に触れてはならない」とあるように、お祭りの準備から期間中は、通常的生活とは異なるさまざまな制約がある。

お祭り全ての行事が終了し、齋戒を解く「**解齋**」(げさい)となり、晴れてもとの生活に戻る。

それが「直会の役割」であり、「直会」を終了してやっと、日常的な、いつもの自分、つまり「ケ」に戻るのである。「直会」を慰労の宴会だと思っていたが、実は重要な意味があった。

大きな祭りに参加したり見物することは、盛り上がりもあるし熱気も楽しめる。

でも伝統的な祭りは神事であり、従って儀式がある。そんなことを少し意識しながらお祭りを見直すと、違ったものが見えてくるに違いない。思わぬところで、日本人としての、貴重な文化を垣間見ることができるかもしれない。おせっかいなヘリクツ屋からの提案である。